

タイ南部沿岸における観光開発と漁業 プラチュワップキーリカン県バーンサパーン湾を事例として

小河 久 志 (大阪大学)
市野澤 潤 平

1. はじめに

マレー半島の北部を占めるタイ南部は、その東岸をタイ湾、西岸をアングマン海に接している。両沿岸では1970年代以降、西岸はプーケット (*Phuket*)、東岸はフアヒン (*Hua Hin*) を中心に観光開発が進められた。そこで必要とされる観光資源は、まずもって美しいビーチであるが、近年ではスクーバ・ダイビングやスノーケリングの隆盛を受けてリーフやそこに生息する海棲生物も注目されている [cf. 市野澤 2010]。

観光開発が進む以前の沿岸域は、主として漁業従事者（以下、漁民と略す）の生業の場であり居住の場であった。そこが観光のまなざしの対象となり、ビーチリゾートとしての開発ラッシュが生じたのは、第二次大戦後（特にベトナム戦争以後）であり、観光開発は、いわば漁業エリアを蚕食するような形で、進行することとなった。沿岸漁業と観光業は、同一エリア内に共存することが難しかったため [市野澤 2010]、漁民と開発業者のあいだにビーチの利用や所有をめぐる競争が起きた。その結果、たとえばプーケット県やバンガー (*Phang Nga*) 県にある国際的なビーチリゾートでは、多くの漁民がそこから排除されることになった [鈴木 2010; 市野澤 2010]。このような、もともとは漁民が居住していたエリア（ただし、漁村は点在しているのであり、沿岸を覆い尽くしているのではない）において大規模な観光開発が進行し、結果として観光業が沿岸漁業／漁民を駆逐していくという流れは、タイにおけるビーチリゾート開発の基本形であったと言って良い [市野澤 2010]。タイの漁民は必ずしも漁業の継続に固執することなく、より収入のよい観光業への生業転換が、比較的スムーズに進んだということも、観光業が漁業に取って代わり得た背景にある¹。しかし、当然のことながら両者の関係は、競争や対立に限られるわけではなく、そのあり様は多様であり得る。

上記の点を踏まえて、本稿では、近年になって観光開発が進みつつある漁民の在住エリアである、タイ南部プラチュワップキーリカン (*Prachuap Khiri Khan*) 県のバーンサパーン湾 (*Ao*

¹ こうした漁民の態度は、例えば沖縄においては、沿岸のサンゴ礁の利用をめぐる競争で、新たにやってきたダイビング業者と、そこで漁業を継続したい地域漁民とが、鋭い対立を繰り広げてきているのとは、対照的である。

Bang Saphan) における観光関連ビジネスを事例として取り上げて、観光業と漁業の相互関係について、共存の可能性という観点から、検討したい。まず第2節では、タイ南部沿岸における観光開発の概要を描く。次に第3節では、視点をバーンサパーン湾に移し、同地で進むリゾート開発の実態とその特徴をS村の事例から明らかにする。続く第4節では、N村を事例に、バーンサパーン湾における漁業をめぐる状況と、漁業と観光業の関係を描写する。最後の第5節では、これまでの事例を考察するとともに、バーンサパーン湾における漁業と観光業のシナジーの創出に向けて若干の提言を行う。なお、本稿の基礎となる資料は、筆者が2012年8月と2013年2月にバーンサパーン湾一帯で行った現地調査から得られたものである²。

2. タイ南部沿岸における観光開発

近年におけるタイ経済の発展は、1961年以降、政府の策定する経済社会開発5カ年計画に則って強力に推し進められてきた。そのなかでタイにおける観光産業は国策として強化され、1982年には、観光収入は米の輸出を抜いて外貨獲得源の最上位に躍り出た。1970年代以降のタイ政府は、観光政策を主導する機関であるタイ国政府観光庁（Tourism Authority of Thailand = TAT）に対して多額の予算割り当てを行ない、大胆で機動性に富んだ観光開発を協力を推し進めた。TATには、観光施設などへの投資権限と、観光関連業界の指導監督権限に加えて、観光開発を行なう地域を選定する権限も与えられた。TATの政策は、タイ全土の観光化を漫然と後押しするというよりも、地理的条件などの慎重な検討を通じて観光開発に適した地域を特定し、国内外の民間資本を呼び込んで、宿泊施設などの観光地における設備基盤の開発を集中的に進めるといったものであった。後述するパタヤ（*Pattaya*）とプーケットというふたつのビーチリゾート開発は、その典型的な事例である。またTATは1980年代以降、国際市場に向けた観光客誘致キャンペーンを精力的に行なった。特に1987年と1988年に行われた「タイ観光年」（*Visit Thailand Year*）および「タイ手芸品年」（*Thai Handy Craft Year*）キャンペーンは大きな成功を収め、その前後の期間だけで約2倍もの観光客増加をもたらした。

1980年代から1990年代前半にかけて、タイの経済は総体として急激な成長を見せた（この間のGDP成長率は年平均10%にも及んだ）。この時期、従来は農業中心型であったタイ経済の構成において、第二次産業・第三次産業の比重が急速に増した。第二次産業の拡大の一因となったのが、政府による積極的な外国企業の誘致である。首都バンコクの近郊や北部のチェンマイ（*Chiang Mai*）県・ランブーン（*Lamphun*）県などに工業団地を設置して道路や電力などの産業

² 現地調査は、筆者である小河と市野澤が、共同で実施した。タイで行った調査では多くの方々にご協力をいただいた。ここに記して謝意を表したい。なお本稿は、総合地球環境学研究所プロジェクト研究「東南アジア沿岸域におけるエリアレイパビリティーの向上」の成果の一部である。

基盤を整備すると共に、税制面における優遇措置などを行い、積極的に外国企業を誘致した。その試みは成功し、外国企業による自動車やエレクトロニクス関連の大規模な投資を得たことにより、タイの工業は大きく躍進した。従来の農産物輸出に加えて外需主導型の工業発展によって蓄積された資本は、観光客を迎えるための設備基盤の整備に振り向けられた [Phongpaichit and Baker 1996]。国内における旺盛な投資に加えて、国際的なホテルチェーンなどの外国企業の進出も相次いだ観光産業は、サービス部門における成長の牽引車としての存在意義を一層強めていった。1980年に186万人であったタイへの交際観光客数は、1993年までに約570万人へと増加した。さらに観光収入でみると、1980年の178億バーツが、1993年には1278億バーツと拡大している。1980年代を通じてタイは大幅な貿易赤字を生み出していたが、成長する観光産業は赤字縮減に大きな役割を果たした。またこの急激な観光客数の増大は、更なる宿泊施設の増強を必要としたため、単純に観光客がもたらす外貨収入以上の賦活効果をタイ経済にもたらした。1990年代以降もタイへの国際観光は順調な伸びを示し、2010年現在、タイは年間の受け入れ国際観光客数が約1600万人、観光収入が約201億USドルという、世界でも有数の観光大国へと成長を遂げた [WTO 2012]。

首都バンコクの外部で大々的に観光開発が進められたのは、チェンマイを中心とする北部、そして南部の海岸沿いのエリアに大別できる。このうち、チェンマイは北部タイにおける独自の歴史や文化的背景、そして山地に居住してきた複数の少数民族を観光資源として、バンコクに増して「エキゾチックな」文化的景観を提供できる場として、国際観光市場に売り出された。対して、南部の海岸沿いのエリアにおける観光開発は、北部のような「文化観光」的な色彩が薄く、欧米人好みのいわゆる「4S」、すなわち“Sea, Sun, Sand (and Sex)”を提供するリゾート地の建設として、進められることとなった。その代表と言って良いのが、タイ湾沿岸にありバンコクから東南方向に150キロメートルほどの近場にあるパタヤと、より遠方のマレー半島を挟んだ西側、アンダマン海に位置するプーケットという、ふたつのビーチリゾートである。いずれも、1960年代から70年代にかけて政府機関により行なわれた調査の結果、長大な美しいビーチに恵まれているなどの地理的な条件が、観光開発に適していると判断されたものである。それらのビーチは、漁村以外には特筆すべき産業がなかった場所であるが、TAT（当時はTOT）の主導の元、交通網や宿泊施設などの設備基盤が急速に整えられ、主に外国人観光客を呼び込むべく、国際観光市場に売り込まれることとなった。

パタヤとプーケットが、明確に外国人観光客の誘致を目指して開発が進められたのに対して、タイ湾西側のエリアにおいては、主にタイ人の観光客を受け入れる形で、ビーチリゾートが発展した。その代表的な場所が、プラチュワップキーリカン県のフアヒンである。フアヒンはバンコクからおよそ200キロメートル、自動車での移動時間が3時間程度の場所に位置しており、南北に延びる白砂のビーチを中心に、ビーチ開発が早い時期から進んだ。フアヒンのビーチリ

ゾートとしての歴史をさかのぼると、20世紀初頭におけるバンコクからマレー半島を縦断する鉄道の開通に、その起源を見ることができる（フアヒンの駅が開業したのは1911年）。フアヒンの近隣には王室関係者が滞在する保養施設があり、現在に至るまで多数の王族が、鉄道を利用してフアヒン界隈へと保養に訪れた（現国王も度々フアヒンを訪れている）。そうした背景から、保養地としてのフアヒンのイメージは王室と結びつけられ、タイの観光市場において、強力なブランド力を発揮した。第二次大戦後の経済成長のなかで、タイ国民の所得が増大し、レジャー需要が増大したのを受けて、フアヒンはタイ人にとってのビーチ観光の一大目的地として、急発展したのである。2007年現在、フアヒンを訪れる観光客の数は年間214万人に達し、そのうちの大多数がタイ人となっている [TAT 2008]。

先述したパタヤやプーケットと比較すると、フアヒンにおいては外国人よりもむしろタイ人が訪問者の中心となっているという違いはあるものの、ビーチエリアの開発のあり方は似通っている。つまり、バンコクやチェンマイのように従来から存在した地域社会や都市空間を土台とするのではなく、外部から短期的にやってくる訪問者が直接落とす観光収入に頼って存立する特異な経済圏として、拡大の一途をたどってきたのである。タイにおける海岸リゾートは、彼方からやってくる観光客の流入路が政府主導の計画によって突然生じ、その到着地点に外部からの資本と労働力が一気に流入することによって成立した、極めて人工的な産業集積だといえる（フアヒンの場合は、先に述べたように王室関係者が訪れる保養地という古い歴史もあったため、パタヤやプーケットよりは発展の速度は緩やかではあった）。そのビーチリゾートとしての拡大過程は、金鉱の発見にともなうゴールドラッシュが、砂漠の真ん中に突如として活気に飛んだ街を生み出す事態にも比せられよう。タイのビーチリゾートに付きものの、繁華街で働く性的サービスを提供する女性たちはその多くが他県の出身者であるが、裕福で気前のいい観光客という金脈を探し当てて一攫千金を狙っている。また、従来からの地域住人で、漁業などに従事していた者たちの多くは、観光関連の職種に鞍替えすることとなった [cf. 市野澤 2010]。タイ湾側・アンダマン海側を問わず、タイにおける海岸エリアにおいては、小規模な漁村が点在し、小型漁船を使つての沿岸漁業が営まれていた。しかし現在、プーケット、パタヤ、フアヒンのいずれにおいても、観光客で賑わう一帯はもちろん、その近隣においても、20年前には日常的であったという、漁民たちが小さな船を操って獲ってきた海産物を水揚げする風景は、もはや限られた場所でしか、見ることはできない。

3. 観光からみたバーンサパーン湾：S村の事例

本稿で取り上げるバーンサパーン湾は、プラチュワップキーリカン県の南部に位置し、マクロにはタイ湾の一部を構成している。行政上は、バーンサパーンヤイ (*Bang Saphan Yai*) とバー

ンサパーンノイ (*Bang Saphan Noi*) の2つの郡³が湾に面している。バーンサパーン湾沿岸は、次節で述べるように海洋資源の豊かな漁場として漁業が盛んである一方、近年その一部でリゾート開発が進んでいる。前節で概観した、パタヤ、プーケット、フアヒンのような著名なビーチリゾートとは異なり、その開発は未だ小規模なものに留まっているが、今後の発展が有望視されている。すなわち、観光開発の程度としては、未開発の伝統的な漁村地帯と、すでに開発が進んだ大規模ビーチリゾートとの中間にある。また年を追うごとに観光関連業者・観光客の双方が増えつつある（筆者が話を聞いた複数の現地の観光業者がそのように述べていた）という意味で、タイにおける観光開発の進行を動的的に捉えることができる、格好の事例でもある。以下、本節では、バーンサパーンヤイ郡S村を事例に、バーンサパーン湾沿岸における観光開発の一端を描き出しておく。

S村の属すバーンサパーンヤイ郡は、タイの首都バンコクから約380キロメートル、プラチュワップキーリカン県の県庁所在地であるムアン郡から約80キロメートル、タイ有数のビーチリゾートであるフアヒンから約170キロメートル南方に位置する。バーンサパーンヤイ郡は、それらと幹線道路（国道4号線）と鉄道⁴で繋がっている。高速バスや鉄道（特急）を使った際の所要時間は、バーンサパーンヤイ郡とバンコクの間が約6時間、バーンサパーンヤイ郡とムアン郡の間が1時間ほど、バーンサパーンヤイ郡とフアヒンの間が約2時間とアクセスは良い。バーンサパーンヤイ郡の中心部には、銀行や郵便局、病院、市場、鉄道駅、バスターミナルがあるなど、生活する上で必要な施設がひとつとおりそろっている。S村は、そこから5キロメートルほど南に位置する。このS村の前浜が、本節で取り上げるSビーチである（写真1参照）。Sビーチは、バーンサパーン湾に沿って南北に延びる全長2キロメートルほどの遠浅のビーチである。そこから水平線を昇る朝日を見ることができると風光明媚な場所である。



写真1 Sビーチ
(2013年2月、小河久志撮影)

3 タイの地方行政は、県 (*cangwat*) から郡 (*amphoe*)、タムボン (*tambon*、複数の村から構成)、村 (*muban*) に至る階層構造を持つ。

4 バーンサパーンヤイ駅には、北部と南部から来る全ての列車が停車する。

（１） S村の観光化の歴史と概要

S村の観光開発の歴史は1990年代前半にさかのぼる。きっかけはSビーチの観光価値に注目した村人が、内陸部の所有地に数棟のコテージからなる宿泊施設「Sリゾート」を開業したことであった。Sリゾートの経営者によると、当時の宿泊客の大半は外国人で、フランス人がその多くを占めていたという（2013年2月12日インタビュー）。その後、1996年にフランス人資本のホテル「Cホテル」が、Sビーチ前に開業する（写真2参照）。これ以降、同地を訪れる観光客を対象とした宿泊施設や飲食店が次々に設置された。Sビーチ一带にある観光関連施設を載せた地図 *Bangsaphan Map*⁵を見ると、同地に16の宿泊施設と4軒の飲食店（宿泊施設に併設するものは除く）があることがわかる。Sビーチには、フアヒンにあるような大型のホテルは存在しない。同地にある宿泊施設は、コテージとレストランからなる小規模なものである（写真3参照）。コテージの間取りは、寝室1部屋に浴室とトイレが付いたタイプが主流だが、複数の寝室やダイニングが付いたものなどいくつかのバリエーションがある。同様に、室内の設備の中身もコテージによって違いがある。宿泊費は、これらの相違を反映するかたちで1泊480バーツ⁶から5,590バーツと幅広い⁷（表1参照）。S村を訪れる観光客の数や国籍は統計資料がないため正確にはわからないが、複数の宿泊施設の管理者の話を総括すると、観光客の大半が欧米系⁸であり、宿泊期間が1週間を超える中長期の滞在者が多いという（写真4参照）。宿泊施設の所有者は、聞き取りを行うことができた8つの宿泊施設に限ってもバンコク出身が4名、バーンサパーンヤイ郡出身が2名、ナコンラーチャシーマー (*Nakhon Ratchasima*) 県出身が1名、海外（オーストリア）出身が1名と、その出自が多様である一方、地元出身者が少ないことがわかる（表1参照）。宿泊施設のなかには、スイミングやマッサージといったレクリエーションを行える設備を敷地内に有していたり、近隣で様々な活動を体験できる機会をオプションで提供していたりするところもある。たとえば前出のCホテルは、大きくホテル周辺の名所訪問とマリンアクティビティにかかわるプログラムを設けている。その内容は、表2にまとめたように多岐にわたる。この他にも、自転車やバイクといった乗り物のレンタルを行っている宿泊施設もある。

5 市販のガイドブックにはない貴重な情報を載せたこの地図は2010年に作られた。現在、バーンサパーン湾にある主だった観光関連施設において無料で配られている。

6 調査時1バーツは約3円。

7 Sビーチが位置するマレー半島東海岸には、大きく雨季（5月～10月）と乾季（11月～4月）がある。大半の宿泊施設が、この季節の違いに応じた宿泊価格を設定している。また、長期滞在者には、1週間以上宿泊すると宿泊費を10%割引する、といったようなサービスも行われている。

8 その理由は、アジア系の観光客が少ない理由とともに定かではない。



写真2 Cホテル
(2013年2月、小河久志撮影)



写真3 Sビーチ沿いに建つ宿泊施設
(2013年2月、小河久志撮影)



写真4 Sビーチでくつろぐ欧米人観光客
(2013年2月、小河久志撮影)

観光客向けの飲食店もまた、宿泊施設と同様に小規模である(写真5参照)。カウンターを中心とするオープンエアの店内では、ビールやジュースといった飲料やタイ料理をはじめとする各種料理が供される。販売価格は、ファヒンなどの大型ビーチリゾートよりも安い点に特徴

がある。Sビーチにある観光関連の施設は、他にも主としてロングステイの外国人を対象とした別荘が10軒ほどある。別荘地の開発は、現在もビーチ一帯で進められている（写真6参照）。



写真5 観光客向けの飲食店
（2012年8月、小河久志撮影）



写真6 別荘地として売りに出されているココヤシ園
（2013年2月、小河久志撮影）

（2）観光地としての特徴

これまでSビーチの歴史と現況について述べてきたが、ビーチリゾートとしての同地の特徴はいかなるものであろうか。以下では、Sビーチと同一県内にあるフアヒンとの比較からこの点について明らかにしたい⁹。

まず指摘できるのは、リゾートとしてのSビーチの規模が極めて小さいということである。宿泊施設に限っても、フアヒンには大小合わせて300をこえる施設がある一方で、Sビーチ一帯には16軒ほどがあるにすぎない。また、宿泊施設の数に比例してSビーチを訪れる観光客の数も少ない。フアヒンのように観光客が大型バスに乗って大挙押やって来る、というようなこと

⁹ 筆者がSビーチ周辺で行ったインタビューに応じてくれた者は、Sビーチの特徴について語る際、必ずといっていいほどフアヒンを引き合いに出していた。このことも、本稿がフアヒンを比較対象とする理由の1つである。

は同地ではない。

こうした特徴ゆえの「静けさ」もSビーチの無視できない特徴の一つとなっている。バーンサパンヤイ郡の中心部とS村を結ぶ3374号線からSビーチに通じる道路の交通量は少なく、夜になるとそこを走る車やバイクはほとんどなくなる。また、Sビーチ帯にある飲食店は、フアヒンをはじめとする大型のビーチリゾートと異なり大音量で音楽を流すことはない。カラオケやディスコなどはなく、遅い店でも日付が変わる前には店を閉じる。また、ナイトマーケットのように多くの観光客を集める施設等はSビーチ帯に存在しない。ビーチもまた喧噪とは程遠い環境にある。Sビーチには、パラソルとデッキチェアが並ぶ以外に何もない。フアヒンでよく目にする売り子や客引きは全く見られない。また、ジェットスキーや水上バイク、バナナボートといった騒音をともなう類のアクティビティは存在しない。

Sビーチの「静けさ」にはまた、観光客の年齢層も関係していると考えられる。こちらも正確な統計データは存在しないが、同地を訪れる観光客に占める中高年観光客の割合が、若年層のそれに比べて高いと、Sビーチの観光業関係者は口をそろえる¹⁰。中高年の観光客が多いからビーチが静かであり、逆にビーチが静かであるがゆえに中高年の観光客が多いともいえる。これもフアヒンには見られない点である。

Sビーチの家族的な雰囲気も無視できない。Sビーチでは、観光関連施設の従業員と観光客の距離の近さを実感する場面にしばしば遭遇した。たとえば、Cホテルの近くにある飲食店のオーナー（女性、50代）は、観光客との関係についてたずねた筆者に対して以下のように語った。

「このビーチは小さいので観光客の数は少ない。だから店に来る客の顔はすぐに覚えられるよ。客とは少し話せばすぐに打ち解けられる。なぜなら、ここに来る客はみな良い人だからね。世代も私と同じか私よりも上だし。客とはいろんな話をするよ。(中略)私はこの店の仲の良い友達の家だと客に思ってもらいたい。(中略)長期滞在する客が多いのは、ここがくつろげるからだと思うよ」

この語りからは、長期滞在者の多さや年齢層の高さといったSビーチを訪れる観光客の特徴とともに、彼らと店主の良好な関係を窺い知ることができる。店主は、それがあがるがゆえにSビーチが観光客にとって「くつろげる場」になっていると考えている。同時にそのことは、Sビーチが観光客を引き付ける魅力の一つとして認識されているのである¹¹。

¹⁰ 筆者も調査期間中に若者の姿をほとんど見かけなかった。

¹¹ この他に、フアヒンにはないSビーチのセールスポイントとして観光業関係者があげたのは、ビーチと海の美しさや物価の安さなどであった。

最後に指摘したいのは、観光客の多くが期間の長短こそあれS村を訪れる前にフアヒンに滞在した経験を持っていることである。正確な統計データは存在しないものの、筆者がインタビューすることができた観光関連施設の関係者の多くの語りがそのことを証明している。たとえば、前出の飲食店の女性オーナーは、これまでの店での観光客との会話等から判断するに、店に来た観光客の大半がすでにフアヒンを訪れていたと言う。彼らがS村に来た理由として、彼女は、上述したフアヒンには無い、あるいはフアヒンではあまり見られないSビーチを持つ特徴をあげた。

4. 漁業からみたバーンサパーン湾：N村の事例

本節では、バーンサパーンノーイ郡N村を事例に、漁業という視点からバーンサパーン湾沿岸域をとらえる。

N村は、前節で取り上げたS村の南に位置する。村の沿岸部はS村とSビーチでつながっている。人口約500人、170近くの世帯からなるN村¹²では、主に沿岸域で行われる漁業とヤシ類（ココヤシ、パームヤシ）の栽培を中心とする農業が村人の生業となっている。村の沿岸部には、村長宅や後述する沿岸資源管理プロジェクトの事務所といった村の重要施設が集まる集落がある。ここが村の政治、経済の中心として機能している（写真7参照）。同地の住民の大半は沿岸漁業に従事する漁民である。彼らは、漁業を専業にする者と副業にする者へと大別される。



写真7 N村の沿岸部にある集落
（2013年2月、小河久志撮影）

（1） N村の漁業

N村の村人が行う漁業は、小規模な沿岸漁業が中心である。それは、1～2名の船員が10ト

¹² N村では、ムスリム世帯2世帯を除く全ての世帯が仏教徒世帯である。

ン未満の動力船を用いて行われる(写真8参照)。一般に船員は、船主とその家族や親族から構成される。沿岸漁業では、刺し網を中心とする漁具を用いて、ワタリガニやイカ、エビ、カタクチイワシといった魚介類が漁獲される。操業は基本的に通年行えるが、海の荒れるモンスーンの時期(10~12月)には波の穏やかな日のみ可能なため他の時期に比べて出漁できる日は少ない。

水揚げは、近隣の村からやってくる2人の仲買人に販売される。N村の漁民の多くは、彼らと排他的な売買関係を結んでいる。一般に資本の僅かな漁民は、仲買人から漁具や操業資金を前借りする代わりに、彼らに市場価格よりも低価で漁獲物を販売する。水産局やNGOなどは、漁民の経済力の低さの原因としてこうした仲買人の搾取的な性格を指摘している。しかし、他方で仲買人は、資金力に乏しい漁民が継続して漁業を行うことを可能にする融資機関としての役割も果たしている[小河 2010: 184-185]。



写真8 N村の漁民が使用する漁船
(2013年2月、小河久志撮影)

(2) 漁業グループ

バーンサパーン湾では、1998年に水産局の主導による住民参加型の水産資源管理プロジェクトが実施された。このプロジェクトは、沿岸漁業に従事する漁民が、当時問題となっていたトロールなどの商業漁業との競争を軽減させて確実に操業できることを目的に、彼ら専用の海域を設定してその利用権を彼らに付与するというタイで初めての試みであった[村上2006:34]。プロジェクトにはN村を含む9つの村が参加している。なかでもN村は、プロジェクトの活動に積極的に参加しており、プロジェクトの事務所が村内に設置されているなど中心的な役割を果たしている¹³(写真9参照)。プロジェクトの活動主体は、村ごとに作られた漁業グループ(*kerum pramong*)である。N村の漁業グループでは、主に回転基金の管理と運営、違法漁業の

¹³ プロジェクトの事務所には水産局の職員が1名常駐している。

監視活動、ワタリガニ銀行 (*thanakhan puma*) の管理と運営、定置網漁 (*po chu'ak*) の管理と運営、稚魚育成場の作成と設置といった活動が行われている。以下にそれらを詳しく見ていきたい。

まず回転基金だが、これは設立の初期に水産局から提供された12万バーツを原資に始められた。参加を希望する漁業グループのメンバーには、毎月100バーツを貯金することが義務付けられている。回転基金の主な活動は、メンバーを対象とした現金の貸付と貯蓄に関わる業務である。運営は、漁業グループのメンバーから構成される委員会が担っている。

違法漁船の監視活動は、メンバーの漁民が中心となって行うボランティア活動である。バーンサパーン湾で実施されている水産資源管理プロジェクトでは、バーンサパーンヤイ郡のメラムブーン山の沿岸から3キロメートルを基線とし、バーンサパーンノイ郡のバーンブート山までの範囲、約240平方キロメートルの海域をプロジェクトの区画海域に設定している。ここでは、全ての種類のトロール漁法、動力機付プッシュネット、動力機付貝類ドレッジ、動力機付（集魚灯付）まき網といった水産資源に破壊的な影響を与えられ考えられる漁法の操業が禁止されている [村上 2006:44]。また、バーンサパーン湾沿岸一帯では、インドゴマサバの産卵期に伴う禁漁期（2月15日～5月15日）が設定されている。漁業グループのメンバーは、こうした漁業管理規定に抵触する漁船がないか監視する。違法漁船を見つけた場合、プロジェクト担当の水産局職員に通報する。その後は、水産局側のイニシアチブで対応が進められる。

ワタリガニ銀行は、漁獲対象の1つであるワタリガニ資源の増加を目的とした活動を行っている。具体的には、メンバーの漁民が放卵直前の母ガニを漁獲した際、放卵するまでプロジェクトの事務所の一角に設置したエアレーション付きの小型タンクで育てている。カニ1匹につきタンク1つが用いられており、タンクにはカニを捕まえた漁民の名前が記される。放卵が終わると、卵は直ちに近くの運河に放流される¹⁴（写真10参照）。

定置網は、タイ水産局と日本の大学の協力のもと2011年に導入された。村の沖合10キロメートル、水深約30メートルの海域に設置されており、2日に1度水揚げされる（写真11参照）。1回の水揚げにつき約6,000バーツ（内訳:4000バーツが人件費、残りはガソリン代や飲食費等）のコストがかかる一方、2,000～20,000バーツの水揚げがあるという。獲れた魚介類は、午前10時頃から漁業グループの建物の前で販売される（写真12参照）。漁業グループの議長であるD氏（男性、50代）によると、回転基金も定置網も現時点では黒字であるという¹⁵。

稚魚生育場は、竹やココヤシなどを使って作られた浮漁礁である。それを水深5～6メートルの海域に設置することで稚魚が集まり、その周囲で成育する。こうした環境を人工的に作る

¹⁴ 母ガニは漁獲者に返される。

¹⁵ D氏によると、N村の定置網はタイで2番目に導入された定置網だという。

ことで、水産資源と漁民の水揚げの増加が試みられている。

以上のようにN村の漁業グループは、沿岸漁業の持続性を高めるべく、主として回転基金の運営と漁業資源の管理・保全にまつわる活動を行っているのである。



写真9 バーンサバーン湾水産資源管理プロジェクトの事務所
(2012年8月、小河久志撮影)



写真10 ワタリガニの卵を運河に放流する漁業グループのメンバー
(2012年8月、小河久志撮影)



写真11 定置網の網上げの様子
(2012年6月 ヤップ・ミンリー撮影)



写真12 販売のために定置網の水揚げを分別する漁民
(2012年6月 ヤップ・ミンリー撮影)

(3) 観光業との関係

漁業にまつわる活動が盛んなN村であるが、その周囲には第3節で見たSビーチをはじめとする観光地がある。それでは、両者はいかなる関係にあるのだろうか。先に答えを述べると関係は極めて薄い。確かに、N村にも観光関連の施設はある。バーンサパーン湾内のタル島 (*Ko Thalu*) にあるホテルが運営する飲食店と売店、タル島とN村を結ぶ連絡船の棧橋がそれだ (写真13参照)。しかし、N村の村長によると、連絡船の乗組員や飲食店の従業員などとしてそこで働く村人はいないという。また、Sビーチの観光関連施設と村との関係も皆無である。たとえば、村人のなかにSビーチで働く者は1人としていない。海産物をめぐる両者の関係からこの点は看取できる。まず、村の漁民が、ワタリガニやイカといった水揚げを直接、Sビーチのホテルや飲食店に売りに行くことはない。また、逆のケースも見られない。Sビーチの宿泊施設が主催する観光客向けのツアーの行き先のなかにN村が入っていないこともまた、観光をめぐる両者の関係性の薄さを明示している。以上のようにN村は、Sビーチやタル島といった観光地に隣接しているにもかかわらず、観光を通した直接的な結び付きがないという状況にある。

つまり、バーンサパーン湾内においては、観光業と漁業、そして観光エリアと漁村とが、ほぼ没交渉のまま独立して共存している。こうした状況は、冒頭で述べたタイにおけるビーチリゾート開発の典型的なパターン、すなわち観光開発が進行するにつれて漁業・漁民が駆逐されていく状況とは、一線を画しているように見える。その理由は単純明快である。バーンサパーン湾内における観光開発が未だ小規模であるために、近隣に位置する漁村地帯を蚕食するには至っていないのである。タイの海岸沿いは伝統的に漁業が営まれているエリアであるが、地理的に見た場合、漁村（漁港や棧橋を中心に形成される漁民たちの集落）はまばらに点在しているのであって、海岸線を覆い尽くしているわけではない。バーンサパーンの観光開発は、そう

した漁村と漁村の間の空間において、現在のところは進行している。



写真13 タル島とN村を結ぶ連絡船の案内板
(2013年2月、小河久志撮影)

5. 考察：観光業と漁業のシナジー

本稿ではこれまで、プラチュワップキーリカン県バーンサパーン湾沿岸の隣接する2つの村落を事例に、同地における観光開発と漁業の現状、ならびに両者の関係性について明らかにしてきた。そこから見えてきたのは、バーンサパーン湾においては、観光開発がいまだ小規模に留まるがゆえに、観光業と漁業とが、ほとんど互いに干渉し合うことなく、別個に存立し続けているという状況であった。

そこで本節では、バーンサパーンにおける現状の萌芽的な観光開発が、①現状から拡大しないことで漁業と観光業との併存を可能とする、②拡大して漁業を駆逐する、という以外の第三のシナリオ、すなわち、③拡大しつつも漁業と共存・共栄する、という可能性について、考察を試みたい。

まず検討したいのは、ビーチリゾートとしてのS村とファヒンの関係である。第3節で指摘したように、S村はファヒンと比較すると小規模かつ開発途上のリゾートである。しかし、そのことは、S村の観光関連施設の従業員や同地を訪れる観光客から肯定的に評価されていた。なぜなら、それに起因する静けさや家庭的な雰囲気といったことが、同地の魅力として認識されていたからである。彼らによるとこれらの点は、大型のビーチリゾートであるファヒンには無いS村の特徴であり、それがあがるがゆえにS村は観光客を集めることができているという。

S村において漁民はビーチ周辺から排除されていない。これは、タイ南部沿岸の大型ビーチリゾートと異なる点である。N村の漁民も述べていたように、近隣の漁民は日常的にSビーチ周辺の海域で操業している。それが可能になった要因として、「あまり開発されていない」というビーチリゾートとしてのS村が持つ特徴を指摘することができる。なぜなら、この特徴が観

光客を引き付ける資源となっているがゆえに、S村の観光に携わる者はビーチ周辺から漁民を排除する必要がないからである

S村の沿岸域は、観光開発が始まる以前はココヤシなどが植わる農地であった。同地がビーチリゾートとなる可能性が生まれた要因は、フアヒンの観光開発が加速化したことである。フアヒンの開発が進み同地を訪れる観光客が増えることで、それ以前のフアヒンが持っていた静けさや家庭的な雰囲気といった特徴は薄れていった。こうしたなか、フアヒンを訪れる観光客のなかに、それらを求めるニーズが生まれたと考えられる。またS村は、フアヒンから電車やバスで2時間足らずで行けるなど、アクセスの面でも問題はなかった。こうした背景のもと、S村は、フアヒンからの観光客の受け皿としての機能を持つようになったと言えるだろう。つまり、観光地としてのS村は、フアヒンから近いという立地的な優位性により、いわばフアヒンからこぼれ落ちる観光客の受け皿として、発展してきた。しかし一方で、フアヒンから近いがために多数の観光客を受け入れるようになってしまえば、現在のフアヒンにはない落ち着いた雰囲気や静けさなどの、バーンサパーン独自の良さは失われてしまう。フアヒンを中心に拡大するマスツーリズムの外延に飲み込まれる形での発展は、長期的な視点から観光開発の持続可能性を考えた場合、得策とは思われない。現在、バーンサパーンに観光客を引きつけている長所が、失われてしまうからである。

それでは、バーンサパーン湾において、フアヒン型のマスツーリズム・デスティネーションとなることなく（＝大規模ビーチリゾートの喧噪に巻き込まれることなく）、現在の規模を越えて観光開発を拡大していくことは、できるだろうか。本稿では、それを実現する道筋として、漁業と観光業を有機的に結びつけることによる、新たな観光資源の創出という可能性を提示したい。漁業と観光業の関係を、排他的なもののみならず、むしろ両者のシナジーこそを、観光客への新たな訴求材料としていくことが、できるのではないか。

本調査を通じて、S村およびその周辺の観光事業者の一部が、漁村に対して創造的な関心を抱いていることが、明らかになった。第3節で見たように、Sビーチにある宿泊施設は、観光客を対象に近隣の名所を訪問するツアーを開催している。その対象の1つに漁村がある（表2参照）。前出のCホテルのセールスマネージャーによると、漁村がツアーの対象となっている背景には、地域の社会や文化に対する観光客の関心の高さがあるという。そして、ツアーの対象となる漁村の特徴として、「昔ながらの生活が残っている村」であることが指摘された。具体的には、村人は沿岸漁業を中心とする第一次産業に従事している、開発が進んでいない、治安が良いといったことである。ここからは、漁村に対するホテル側の過度なエキゾチシズムを読み取ることができる。現在、ツアーの対象となっている漁村は、Cホテル主催のツアーではホテルから40キロメートルほど離れた場所にあるなど、アクセスが良いとは必ずしも言えない。その一方で、観光業関係者のニーズを満たす可能性のある漁村はSビーチ周辺にも存在する。

たとえば、前節で取り上げたN村もその1つである。N村は、先述のようにS村に隣接しているにも関わらず、観光業とほとんど関わりを持っていない。しかし、同村は、漁業と農業が村人の主たる生業であり、村人の団結心が強く治安が良いなど、上述したCホテル側のニーズをかなりの程度満たしている。

Cホテルの関係者は「条件にあう村が近くにあればツアーに取り入れたい」と語る一方、N村の村長はこの件について「漁民の生活を知ってもらい良い機会」と答えるなど、双方ともに関係性の構築に意欲的である。巨大観光産業集積であるフアヒンに対置してのビーチリゾートとしてのS村の良さである、「開発が進んでいない」という特徴は、S村の近隣に点在する漁村を観光アクティビティの目的地として取り込むことで、少なくとも観光客への見せ方としては、より強化し得るだろう。S村そのものが、宿泊施設の建設などによる開発が進んだとしても、S村を起点として催行される観光ツアーが、「古き良きタイの田舎」を客に体験させるのであれば、バーンサパーン湾の観光全体のイメージは、「未だ開発が進んでいない」ものとして保持し続けられる。のみならず、チェンマイの「山地民」観光が提供しているのと比肩可能な、顧客のエキゾチシズムを満足させる「文化観光」のコンテンツとして、フアヒンが提供し得ない新たな魅力の創出にもつながる¹⁶。

加えて、バーンサパーン湾周辺で見られる稀少な海棲生物を用いたワイルドライフ・ツーリズムも、漁業と観光業とのシナジーを生み出す上で、大きな可能性を秘めている。バーンサパーン湾の近海には、「とる資源」であるアジ、フェダイ、カマスといった魚介類が多く生息する一方、「みる資源」としての価値の高いイルカやジンベエザメといった海棲生物も生息している。たとえば、N村の漁民によると、湾内には2種類のイルカが生息しており、漁の最中にしばしば遭遇するという。また、イルカほど頻度は高くないものの、ジンベエザメも沖合で見ることができるという。N村の漁民は、個人差はあれども、これまでの経験から生息場所をはじめとするそれら海棲生物に関して詳しい情報を持っている。漁業の傍らで漁民が蓄積してきた、海棲生物の生態に関する、漁獲高には直接関係しない知識を、観光業の文脈で活用することができるのではないか。

¹⁶ ただし、北部タイの山岳トレッキング・ツアーのような、地域村落（特に民家）への宿泊を伴う観光アクティビティを展開していくのは、難しいと思われる。バーンサパーンの観光地としての魅力の源泉は、あくまでもビーチにあるからだ。現状、漁村を訪れるような「文化観光」は、ビーチリゾート滞在への付随物として観光客へ訴求するものであり、それ自体が主たる目的とはなっていない。ビーチリゾートにやってくる観光客は、ホテルやコテージのようにプライバシーが保たれた西洋風の宿泊施設（そして西洋人に合わせたサービス）を好む傾向にある。そうした観光客にとっては、漁村の訪問は、ビーチリゾートで過ごすバカンスのアクセントとして、日帰りツアーという形では、受け入れられないようである。また、本格的な村落滞在を楽しむタイプの観光客は、ビーチリゾートで開発されてきたフアヒンやバーンサパーン周辺のツアーよりも、比較的豊かな自然にアクセスできるアンダマン海沿岸（バンガー県など）のエコツーリズムを、選択するだろう。

筆者が聞き取りをしたN村の村長や漁民は、イルカやジンベエザメといった海棲生物を観光資源として利用することに高い関心を示していた。それは観光業関係者の側も同じであった。たとえば、前出のCホテルのセールスマネージャーは、イルカやジンベエザメを觀賞するツアーを開発することが、ホテルひいてはビーチリゾートとしてのSビーチの魅力や価値を高める機会になると評価していた。加えて、地元住民と観光業関係者の双方は、エコツーリズムを行う際に、各自が持つ知識や経験を活かすかたちで連携する必要があるとも認識していた。イルカとジンベエザメはどちらも、それ単独で、熱心なワイルドライフ・ツーリストを呼び込む観光資源となり得る。通常のビーチリゾート訪問客と違って、希少で魅力のある生物を目的にやってくる観光客は、その目的の達成のためなら、少々の追加出費はいとわれない傾向がある。イルカやジンベエザメを売り物にする観光は、海水浴客の誘致とは異なり、資源保全のために客数を厳格に制限する必要がある。したがって薄利多売の戦略は望めないものの、客単価の高いビジネスとして、比較的小規模にとどまりながらも、地域経済にとって無視できない規模の売り上げを得ることは、可能だろう。

最後に、タイの他の沿岸域とは異なるバーンサパーン湾に独自の可能性として、本稿では、N村で行われている定置網を観光資源として用いるという案を、提示しておきたい。定置網は、一度に多くの種類の魚介類を生きたまま獲ることができる。それは、すでに日本国内で観光化されていることから分かるように、観光資源としての潜在力は高い。また、定置網は、他の漁法と比べて自然環境に優しい漁法であることから、環境保全や資源管理といった問題に関心のある観光客のニーズにも応えることができる。定置網の観光化は、村の漁民にとっては収入が増える好機であると同時に、彼らが行っている水産資源管理の取り組みについて広く知ってもらう機会ともなる。他方で、Sビーチ周辺の観光業関係者にとっては、労力やコストをかけることなく近場に新たな観光スポットを作ることができるというメリットがある。バーンサパーン湾におけるイルカやジンベエザメは、漁民による目撃頻度が高いといっても、観光ツアーを組んだ際に、客に見せることができると確約できるような対象ではない。どちらも完全な野生状態にあり、餌付けなどでその場に留めおいていないのではないからだ。しかし、仮にイルカもジンベエザメも出現しなかったときに（また海況が悪くてそれらのツアーを催行することがそもそも出来なかった場合に）、定置網観光は一種の「保険」として機能し得る。定置網漁見学それ自体は、さほど観光市場への訴求力が高くなくとも、イルカやジンベエザメを見る観光と組み合わせると、その補完／保険コンテンツとして位置づけることが出来れば、タイの他地域にはない、「目的を外してもがっかりさせない」ことを売りにしたワイルドライフ・ツーリズムとして、肉付けしていけるかもしれない。

6. おわりに

観光開発が進むタイ南部沿岸にあって、沿岸漁業は新興産業である観光業の隆盛の前に衰退を余儀なくされている。こうしたなか、当事者である漁業と観光業双方の関係者のあいだには、本稿で触れたようなシナジーを生み出そうという意識はほとんど見られない。また、この状況に対する行政やアカデミズムの側の反応は極めて鈍い。

観光開発が漁業を駆逐するという、タイでは半ば当然のこととして進行してきたプロセスには、当然ながら、漁民の生活保全という観点からして、問題がある。加えて、沿岸の多様な自然・生態系を利益創造に活用するという文脈においても、理想的な状況であるとは言い難い。もともと漁業という文脈において活用されてきた水産資源は、観光という異なる文脈に置き直されれば、より大きな現金収入を生み出す源泉となり得る。しかしながら、それは同時に、漁業という既存の資源活用の道筋を棄却することであり、漁村という共同体が育ててきた、地域の自然資源に立脚した文化社会的な伝統を破壊することでもある。本稿では、パタヤ、プーケット、フアヒンの発展史が語るように、タイの沿岸域におけるビーチリゾート開発は、そのような犠牲を払ってしか成り立ち得ないのだろうか、という疑問から、バーンサパーン湾における萌芽的な観光開発の現状と、観光地と漁村との関係とを整理した上で、今後の観光開発の方向性について、ささやかな考察を展開した。

バーンサパーン湾における観光開発の今後を考えると、仮にフアヒンのような大規模な発展を見た場合、過去の事例に鑑みると、現在のような観光業と漁業との共存状態が保たれるとは考えづらい。一方で、バーンサパーンにおける観光開発が「小規模」の域を出ずにとどまれば、観光業と漁業の共存状態は継続する。しかし、現にバーンサパーンが観光地としての潜在力を見込まれている中で、観光開発を現状維持にとどめ置くのは、沿岸域における経済的な発展可能性を封じ込めることと同義であろう。

本稿が提示したのは、バーンサパーン湾における観光業と漁業のシナジーの創出に向けての、若干の提言であった。そこでは、バーンサパーンを舞台とする観光が、沿岸域の自然環境と漁民（の知識と活動）を観光資源として取り込むことで、フアヒンのような大規模なマスツーリズム・デスティネーションとは一線を画す形で発展していく可能性が、示唆された。漁業と観光業の有機的なリンケージを見いだすことは、沿岸域の持続可能な発展にとって不可欠な作業である。それは、沿岸域が持つ潜在力について知り、それを高める方途を探求することでもある。本稿は、この未開拓の領野を対象としたパイロットスタディとして、今後の研究の進展に寄与するはずである。

参考文献

- 市野澤潤平 2010「〈獲る〉海から〈見る〉海へ——ワイルドライフ・ツーリズムによるリーフの観光資源化」『年報タイ研究』10：17-34.
- 村上亜希子 2006「水産資源の共同管理に資する回転基金と漁業権制度の分析——タイにおける共同管理プロジェクトを事例として」修士論文（東京大学新領域創成科学研究科）.
- 小河久志 2010「分断するコミュニティ——タイ南部津波被災地の復興プロセス——」林勲男（編著）『自然災害と復興支援（みんなく実践人類学シリーズ9）』、明石書店、pp.108-202.
- Phongpaichit, P. & Baker, C. 1996 *Thailand's Boom!*, Chiang Mai: Silkworm Books
- 鈴木佑記 2010「『悪い家屋』に住む——タイ・スリン諸島モーケン村落の動態」林勲男（編著）『自然災害と復興支援（みんなく実践人類学シリーズ9）』、明石書店、pp.155-180.
- TAT 2008 *Thailand Tourism Statistics*, Tourism Authority of Thailand.
- WTO 2012 *UNWTO Tourism Highlights, 2012 Edition*, World Tourism Organization.

表1 Sビーチにあるおもな宿泊施設（2013年2月12日現在）

	宿泊施設名	開設年	コテージ数(棟)	空棟数	料金(1泊あたり)	オーナー
1	Cホテル	1995年	22(コテージ)、 20(客室)	満室	2,900~5,590B	フランス人
2	Cリゾート	2010年	4	満室	1,200B	タイ人(バンコク)
3	Tリゾート	2002年	4	1	1,200B	タイ人(バンコク)
4	Pリゾート	2009年	4	満室	1,200B	タイ人(コラート)
5	SLリゾート	2007年	11	11	1,000B	タイ人(バーンサパーン ヤイ郡)
6	Bリゾート	2010年	10	5	12,00B	タイ人(バンコク)
7	Aバンガロー	2011年	5	2	1,500B	オーストリア人
8	Sリゾート	1992年	11	7	480~1,380B	タイ人(バーンサパーン ヤイ郡)

出所：聞き取り調査をもとに筆者作成。

注：B=タイ・バーツ。調査時1バーツは約3円。

表2 Cホテルが主催するおもなツアー（2013年2月13日時点）

① 名所訪問

時間	テーマ	内容
半日	バーンサパーンの市街と村落を発見する	バーンサパーンノイ郡とバーンサパーンヤイ郡にある市場や駅、仏教寺院等を訪問する
	村、寺院、大仏	ポートンラン地区にある漁村と大仏のある仏教寺院を訪問する
	ローカルエコノミー	ココヤシ園、パームヤシ園、エビ養殖場を訪問する
	滝	近郊にある滝とパイナップル農園を訪問する
	タイーミャンマー国境	ホテルから20kmほど離れたタイーミャンマー国境付近の山岳地帯を訪問する
	洞窟：寺院を発見する	133体の仏像が安置されている洞窟を訪問する
	自然を発見する自転車ツアー	自転車に乗ってバーンサパーン周辺のココヤシ園やゴム園を訪問する
	蘭市場	県内のミャンマー国境付近にある蘭市場を訪問する
	エレファントサファリ	クイブリー国立公園で車内から野生の象を観察する
1日	トレッキング	クイブリー国立公園をトレッキングして動植物を観賞する
	トレッキング&ラフティング	チュムボーン県の山地を上り動植物を観賞した後、ボートに乗って川下りをする
	国立公園とプラチュアアップキーリカン	プラチュアアップキーリカン市内にある水族館、猿の住む丘、国立公園内の滝等を訪問する
	南部沿岸の魅力	チュムボーン県にある仏教寺院、漁村、ビーチを訪問する
	サムロイヨット国立公園	フアヒン南部にあるサムロイヨット国立公園を訪問する
	フアヒン	フアヒン市内を見物し買い物をする
	ラノーン県、カオソン島（ミャンマー領）、温泉スパ	ラノーン県を經由してミャンマー領のカオソン島を訪問した後、温泉スパに入る
	トレッキング&サファリ	クイブリー国立公園内でトレッキングとサファリを行う

② マリンアクティビティ

時間	テーマ	内容
半日	日の出に行う伝統的な釣り漁	早朝に沖合で船釣りをする
	タル島	バーンサパーン湾にあるタル島でスノーケリングを行う
	2つの島：シン島とサン島	バーンサパーン湾にあるシン島とサン島でスノーケリングを行う
	遠方の島でスノーケリング	チュムボーン県パテウ湾沖の小島でスノーケリングを行う
	カヌーを使った川下り	ホテル近くの川をカヌーで下る
	沿岸遊覧	沖合の島々を船で周遊する
1日	沿岸遊覧	沖合の島々を船で周遊する
	3つの島(タル島、シン島、サン島)	タル島、シン島、サン島でスノーケリングを行う

出所：Cホテル作成のパンフレットをもとに筆者作成。

注：上記以外にもスラターニー県やアンダマン海をめぐる2~3泊のツアーや、スクーバダイビングをはじめとするマリン・アクティビティに関するプログラムが用意されている。